東南アジア—近代美術の誕生

崔敬華

後小路雅弘は本展の図録にこう書いている。「昨今の『アジア現代美術ブーム』ともいえるような、突出して現代美術の紹介だけが頻繁に行われることに対し、危惧を感じること、また着実な調査研究に基づいた誠実な紹介を重ねてゆくことだけが表層的で破壊的な『ブーム』を乗り越える方法であると考えることが、本展の動機である」[1]。1997年、福岡市美術館を皮切りに、広島県立美術館、静岡県立美術館、東京都庭園美術館で開催された本展は、フィリピン、インドネシア、マレーシア、シンガポール、タイ、ベトナム6カ国を取り上げ、各国のアドバイザーとして参加したロドルフォ・パラス・ペレス、ジム・スパンカット、レッザ・ピアダサ、ソンポーン・ロドボーン、チャン・ヴィエト・ソンと後小路によって選定された、19世紀末から1960年代頃の絵画彫刻作品およそ150点を展示した。

図録には各国の近代美術の概要、時代に沿って設けられたテーマ解説と作品図版が解説付きで掲載されており、国民国家の形成に至るまでの独立運動やナショナリズムの勃興の中で、作家たちがどのようにネイション（民族／国民／国家）を描き、美術運動を形成したのかを辿ることができる。その変遷において、第二次世界大戦中の日本軍によるシンガポールの南洋美術専科学校の閉鎖や、インドネシアの啓民文化指導所の設置が、各国の美術に及ぼした影響についても言及している。しかし、後小路が論考で指摘し進展を期待した、日本と東南アジアの近現代史に立脚点を据えた東南アジア美術研究は未だ進んでいない。

[1] 後小路雅弘「序説：東南アジア近代美術の誕生：その種子はやがて 大きく強い翼を持つガルーダとなり 君を載せて天空に昇るだろう」『東南アジアー近代美術の誕生』展覧会図録、福岡市美術館、広島県立美術館、静岡県立美術館、財団法人東京都歴史文化財団、読売新聞社、美術館連絡協議会、1997年、p.10

「東南アジア―近代美術の誕生」開会式、福岡市美術館、1997年
写真：後小路雅弘